

山の神と化粧木(その2)

東日 高速道路(株)技術部次長 阿部 公一

安全祈願と化粧木・化粧木の設置

トンネル掘削工事にあたっては、そのトンネル坑口には化粧木が置かれる。化粧木を置く理由は後述する化粧木の由来と密接に関係するが、いずれ山の神への信仰や工事安全を祈る気持ちに関連していて、トンネル工事従事者のほとんどが、トンネル延長にかかわらず必要だといっている。

避難坑(補助坑)と本坑を並べて掘削する場合や、側壁導坑方式で掘削を開始する場合、いずれの坑口にも化粧木を配置するという。危険な作業空間である坑内は、それぞれが神聖な神域であり、神域の境界を示すには、山の神の同一性や唯一性を問うことなく、各坑口に化粧木が置かれる。

さらに化粧木は山岳トンネルに限定することなく、海底トンネル工事も置くとの意見が多く、実際に青函トンネルの工事に従事した者は、入坑する斜坑坑口に化粧木を置いたと具体的に証言している。

一方、シールドなどの都市トンネルには一般に化粧木を置かないとの回答が複数あるが、その実態はわからない。

このトンネル坑口に置かれる木材は、「化粧木」の呼び名のほかに、稀に「飾り木」や「おしぎ」「神木」とも呼ばれることがあるようだが、圧倒的に「化粧木」と呼ばれることが多い。

この化粧木をなぜ「化粧木」と呼ぶのかとの疑問には、アンケート回答者による「斧指という職人が丹精込めて木を磨き、反りをつけて化粧するから」「つるつるに木を鏡のように磨くから」「山

の神は女性で、山の神のいる坑口を飾るから」との回答が自然で納得しやすい。

化粧木の来歴

化粧木の来歴はどこにあるのだろうか。トンネル工事従事者が語るその来歴について、神域の入り口を表象する「鳥居」だとする説や神様が降臨するための「依代」だとする説が代表的であり、その意味合いについて考える。

こうした有力な説のほかにも、さまざまな説があり、決して単純ではなさそうだ。

ゼネコンに勤務する技術者を中心に、化粧木の来歴を「兜の飾り」とする回答を得たのは意外だった。その理由として、「女性である山の神は、勇ましい男が好きだから」というのだ。確かに兜の立物と似ていなくもないが、そこには神性は感じられない。

その他、「刃」「船」「神様の角」「ゴボウ締めつの注連縄飾り」といった意見や、化粧木は松丸太の皮をむいて製作するのに関連づけて「男根」を隠喩しているとの意見も得られたが、ここでは一つ一つ吟味することはしない。

化粧木は神域の入口を表象する「鳥居」

アンケート調査の回答者の中でも、化粧木の来歴を「鳥居」だとする意見が圧倒的に多い。

鳥居は神社の内と外を分ける境に立てられる。鳥居から内側の境内は、神聖なる神の領域・神域である。すなわち、鳥居は神社の神域の入口を示

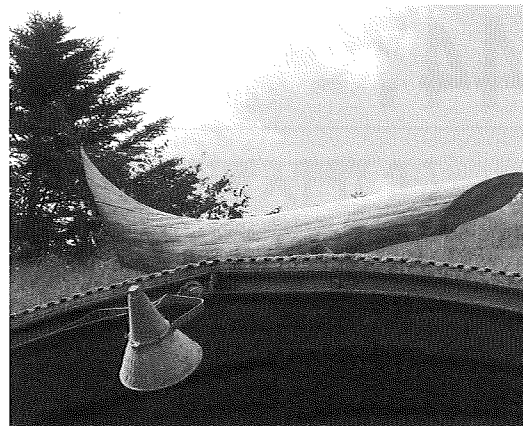


写真-2 化粧木の例(常磐自動車工事)

す「門」ともいえ、俗界と聖界とを分ける表象であるという。

山の神は、トンネル坑内の一番奥にいて、その坑内は神聖な神域であって、坑口に置かれる化粧木は鳥居と同じく、神域の入り口を示す表象というのだ。

奈良県の大神神社は御神体が三輪山そのものであるように、特定の神殿をもたず、山など自然物を御神体または依代として祀っている神社の中には、その前に鳥居が立てられ、神様の存在を表している場合がある。

トンネル坑口に置かれる化粧木は、これと同じで、化粧木の下をくぐって一步坑内に入ると、そこは神聖な神域であるといえ、トンネル工事にかかわるさまざまな禁忌が、この神域での作法を説いていると考えると納得しやすい。

鳥居の形態は、二本の柱の上に笠木・島木を載せ、その下に貫を入れて柱を連結したものを基本とし、神社全体の建築や祭神の性格に応じてさまざまな様式がある。頂部にある笠木・島木が上部に反り返っていることを反増そりましというが、化粧木の形状は、反増のついた笠木の形と酷似している。

化粧木は「鳥居」の象徴だとする意見を納得させる写真がある。トンネル工事専門会社に長く勤務した方が提供してくれた写真は、写っている作業員の服装から昭和30年代の工事風景と思われる。もちろん鋼アーチ支保工なわけもなく、丸太材で捨て枠を組み、その上に坑口幅と同じ長さの化粧



写真-3 鳥居の基本形と各部の名称



写真-4 宇佐鳥居を模したという化粧木(N氏提供)

木を置き、さらに化粧木の中央に神棚を据えている。まさに化粧木は反増のついた「笠木」「島木」に、その下にある水平丸太材は「貫」に相当し、全体の形状はまさしく鳥居にそっくりである。

写真の提供者は、明治時代に炭鉱の導坑掘削に腕を振るいその後「豊後土工」と呼ばれたトンネル坑夫の技能集団が、彼らの出身地である大分県上浦町の宇佐神宮の宇佐鳥居の形を模したのが、全国に広まったと述べている。

現在は鋼アーチ支保工で捨て枠(化粧枠)を造り、その上に化粧木を置くので、鳥居の形状から離れてしまったが、化粧木を坑口幅と同じくらいにたっぷりした長さとし、「笠木」「島木」の形を意識すると、神域の入り口を表象する「鳥居」の記憶が蘇るかもしれない。